

『入中論』 チャンドラキールティ (月称)

目次

第一発心「歓喜」	・・・2
第二発心「離垢」	・・・4
第三発心「発光」	・・・5
第四発心「焰慧」	・・・7
第五発心「難勝」	・・・7
第六発心「現前」	・・・7
第七発心「遠行」	・・・38
第八発心「不動」	・・・38
第九発心「善慧」	・・・38
第十発心「法雲」	・・・39
十地において菩薩が得る功德について	・・・39
仏陀の境地における功德について	・・・40

【このテキストは、ダライ・ラマ法王による『入中論』法話会参加者のための暫定的な試訳である】

凡例

- ・ 各偈（四行詩）の1行目、2行目、3行目、4行目はそれぞれ、a, b, c, d, で記した
- ・ [] は加筆部分、() は説明を表す

第一発心「歡喜」

サンスクリット語で、マディヤマカ・アヴァターラ・ナーマ
チベット語で、ウマ・ラ・ジユクパ
(『入中論』)

若き文殊菩薩に礼拝いたします

(なぜ始めに大悲を称えるのか)

1

声聞、独覚たちは仏陀より生じる。
仏陀は菩薩より生まれる。
慈悲心と不二の智慧と菩提心が
勝利者仏陀の息子たち(菩薩)の因である。

2

慈悲こそが、〔最初には〕勝利者仏陀の豊かな収穫の種であり、
〔途中には〕成長のための水のようなものであり、
〔最後には〕長い間楽しむための実りのようなものだと言われている。
ゆえに、私は始めに慈悲の心を称えよう

(慈悲の心について)

3

最初に、「私」と言って自我に執着し、
〔次に〕「私のもの」と言って事物に執着し、
井戸の中を上下するバケツのように〔輪廻の生を回り続ける〕自由のない有情たちに対し、慈悲
の心を起こされる方に礼拝いたします

4

有情をさざめく水面に映る月のように
儂い空の自性を持つものと観て
勝利者仏陀の息子(菩薩)は一切有情を解脱させるため
慈悲の心に支配されている

5

普賢菩薩の請願によって廻向し、歡喜の地にとどまること
それを〔菩薩の〕初地と言う
それよりかの者(菩薩)はそれ(菩提心)を得たことにより
菩薩というその名で呼ばれている

6

この方は諸如来の系譜にも生まれ
これにより三つの束縛をすべて断滅された
この菩薩は最勝なる歡喜〔地〕に至り
世間百界のすべてを動かすこともできる

三つの束縛(見所断)：見道で断滅すべき三つの障り

1 有身見：我と我がものへの我執)

2 戒禁取見：外道の戒律や苦行を解脱の因と考えること

3 煩悩にまみれた疑心

7

〔菩薩の〕地から地へと制圧し、より高い境地へと進んでいく
その時、あらゆる悪趣への道は余すところなく滅される
その時この菩薩には、一切の凡夫の境地が尽きたのである
この菩薩は、〔声聞の〕聖者の第八地(預流果)〔に達した人〕のように見なされる

第八地とは、四向四果（四双八輩）という八種類の段階を上から数えて第八番目の預流果に入った段階。預流向という因の結果として名づけられる。

四向（四種の結果に向かって修行する人）：

預流向（見道に入った人）、一來向（一來果に向かう人）、不還向、阿羅漢向

四果（四種の結果の境地に到達した人）：

預流果（修道に入った人）、一來果、不還果、阿羅漢果（＝無学道）

8

完全なる悟りを目指し、第1地にとどまっている者たちでも

世尊のお言葉から生まれた者（声聞）や独覚たちを

高められた福德の力によって打ち負かす

〔第7地〕「遠行地」における智慧も〔声聞・独覚たちより〕卓越する

（布施波羅蜜）

9

その時、完全なる仏陀の悟りに至る第一の因は布施であり

まず布施行が卓越する

自分の肉を与えるにも敬意を持ってなすならば

それが見えないもの（利益）を推測する因にもなる

（菩薩でない者の布施）

10

すべての生きものは幸せを求めている

人の幸せもまた、財産がなければ得られない

財産もまた、布施から生じると知ることにより

成就者仏陀はまず始めに布施の話をされた

11

慈悲心が劣り、非常に粗野な心を持ち

自利のみを求める

そのような人たちでさえ、布施行という因により

望む財産を得て苦しみを鎮める

12

そのような者たちも布施行〔の實踐に〕により

いつの日か速やかに聖者にまみえる機会を得る

それから輪廻の連続体の流れを完全に断ち切って

その因となるものを鎮めていく

（菩薩の布施）

13

有情利益を誓う心を持つ者は

布施行によって遠からず歓喜の地に至る

ゆえに、慈悲の本質を持つ者にも、持たない者にも

布施の話は基盤である

14

くださいという言葉聞くことを考えるだけで

勝利者の息子（菩薩）は幸せ（樂）を得る

しかし〔声聞・独覚の〕阿羅漢たちは〔涅槃の〕寂靜に入り、そのような幸せを得ない

それならば、一切を与えれば〔菩薩に幸せが生じるのは〕言うまでもない

（無執着の境地に至っていない菩薩の布施）

15

自分のからだを切って与える私の苦しみにより

他の人々の地獄などの苦しみを
自ら〔の痛みとして〕知るにより
その苦しみを断つために、速やかに精進〔の修行〕を始める

（世間と出世間の布施波羅蜜）

16

施す物、受け取る者、与える者は〔自性のない〕空〔の本質〕であると知る布施は
出世間の波羅蜜と言われる
三つのものに執着を生じると
世間の波羅蜜と言われる

（初地が完成した時の功德）

17

そのように勝利者の息子（菩薩）の心に安住し
卓越した抛り所を光で飾るこの「歡喜〔地〕」は
水晶の宝珠のようであり
一切の厚い暗闇を晴らし打ち勝つものである

第一発心の解説を終えた。

以上が『入中論』の解説より、「歡喜」と名付けられる第一発心である

第二発心「離垢」

1

〔第二地の菩薩〕は卓越した功德を持つため
夢の中でさえ破戒の汚れを滅する
身口意の行いが清浄なので
卓越した行いを十〔に分類された〕道によって集積する

（十善行道）

2

〔第二地の菩薩にとって〕この善行の道は〔身口意の他に〕十にも〔分類される〕が
それは卓越しており、非常に清浄である
秋の月のように〔第二地の菩薩は〕常に清浄で
寂静な光によって美しく飾られている

（持戒清浄を実体とみては持戒清浄にならない）

3

もし、〔第二地の菩薩が〕戒律を清浄に維持していると実体視するならば
それを理由に、その菩薩の持戒は清浄でなくなる
ゆえに、菩薩は常にこの三つに対して
〔有、無などの〕二元性にとられることなく離れているべきである

（持戒は功德一切の抛り所である）

4

布施による〔樂の〕享受は
たとえ戒律という足が衰えて悪趣に墮ちたとしても生じる
ゆえに、生まれ持った〔徳〕の集積が完全に尽きたなら
それ以降はその人に〔樂の〕享受は生じない

5

自由に振る舞い、見合った場所に住んでも

もし自分を〔悪趣から〕守らなければ
崖から奈落に落ちて他者に支配されることになる
今後、誰がそこから立ち上がれるというのか

6

ゆえに、勝利者仏陀は布施の話をされてから
続いて持戒の話をされたのである
持戒の大地で徳が高まれば
結果の享受は途切れることなく続いていく

7

凡夫たちと〔仏陀の〕お言葉から生まれた者（声聞）と
独覚〔の悟りが決定した者〕と
菩薩が得る究極の目的（一切智の境地）と一時的な目的（善き再生）は
持戒以外から生まれることはない

8

海は死骸とともに存在し
幸福の女神は不幸の女神とともに存在するように
戒律の力で鎮められた偉大な者たちは
破戒とともに住することを望まない

（このように説明された戒律について、波羅蜜の分類を説明すると、）

9

誰が、何を、誰に対して滅するのか
この三つの対象〔を理解するならば にとらわれがある〕ならば
〔その菩薩〕の戒律は世間の波羅蜜であると言われる
この三つに執着しないことが出世間〔の戒律〕である

（持戒波羅蜜について完全に説明する）

10

解脱月菩薩（ヴィムクティ・チャンドラ）の稀有なる栄光によって生じた
汚れのないこの「無垢の地」も
秋の月の光のように
有情の心の苦しみを晴らした

以上が『入中論』の解説より、「離垢」と名付けられる第二発心である。

第三発心「発光」

1

認識対象（所知）という薪を余すところなく燃やし尽くす〔智慧の〕火によって
光が生じるため、この第三地を「発光」と言う
その時、〔第三の菩提心生起が生じた〕如来の息子（菩薩）には
太陽のような銅の輝きが現れる

2

もし、怒りに猛り狂って凶暴になった人が
〔菩薩〕のからだから肉を骨とともに
少しずつ長い間切り取ったとしても
その〔菩薩〕の忍耐は切断する人に対してより強く生じる

（菩薩の忍耐について）

3

無我を見た菩薩は、
何を、誰によって、いつ、どうやって切られるのかを
あたかも映像のように見る
それにより、菩薩は常に忍耐を修行する

4

害されて、もし怒るなら
その人に怒ることで害されたことが帳消しになるというのか
ゆえに、怒ることにまったく意味はない
来世においても逆効果である 望む結果と矛盾する

5

以前になした不善の行いの果報は
尽きたと言いながら 言うことで
他者を害し、怒ることで苦しみが生じるのに
どうして苦しみの種を蒔いているのか

6

勝利者の息子（菩薩）に怒ることで
布施と持戒から生じた百劫にわたって積んだ善が
一瞬のうちに打ち壊されてしまうのだから
怒りよりも悪い不徳の行いはない

7

〔怒りは〕醜い姿を晒し、卑しさを導く、邪悪なものになる
正しいものとそうでないものを知る知性を奪い取る
忍耐しないことにより、いち早く悪趣に投げ込まれる
忍耐は、すでに述べた〔悪い〕性質と反対の〔善き〕資質を作り出す

8

忍耐によって美しくなり、聖者たちに好かれ
善悪の区別に長けて賢者となり
のちに人や神として生まれて
不徳を滅することになるだろう

9

凡夫と勝利者の息子（菩薩）によって
怒りの過失と忍耐による功德を知り
忍耐しないことを
聖者が称える忍耐に常に速やかに依存するべきである

10

完全なる仏陀の境地に廻向しても
もし三つの対象〔へのとらわれ〕があるならば、〔忍耐の修行〕は世間の波羅蜜である
〔三つの〕対象〔へのとらわれ〕がなければ
それこそ出世間の波羅蜜であると仏陀によって示されている

（四禅定・四無量定・五神通）

11

この地において、菩薩は禅定と神通力〔を得て〕
食欲と怒りは完全に滅し尽くされる
それにより、常に世間の欲望という食欲を
克服することができるだろう

12

布施、〔持戒、忍耐〕などの三法（＝三つの修行）は
大概の善逝が在家の者たちに称えている
福德と言われる資糧もまた、これら〔の三つであり〕
仏陀の色身の本質の因である

13

勝利者の息子（菩薩）である太陽の「発光」は
まずその菩薩の闇を完全に晴らしてから
有情の闇を完全に打ち負かすことを望む
この地で〔菩薩の心は〕非常に鋭くなるが、怒ることはない

以上が『入中論』の解説より、「発光」と名付けられる第三発心である。

第四発心「焰慧」

1

一切の功德は精進の後に従って〔生じる〕
福德と智慧の二資料の集積が〔精進の〕因であり
精進が燃えさかるのが
第4地の焰慧である

（三十七菩提道品の修行）

2

そこで善逝の息子（菩薩）が
完全なる悟りのために特にすぐれた瞑想修習をしたことにより
銅の光よりまばゆい現れが生じて
自我へのとらわれ（有身見）を離れ、完全に滅し尽くす

以上が『入中論』の解説より、「焰慧」と名付けられる第四発心である。

第五発心「難勝」

1

難勝の地に住する偉大な者たちは
難勝の地にすべての悪魔によってさえ打ち負かされることはない
〔この地の菩薩は〕禅定に特にすぐれ
善き心を持つ者たちの真理（善慧諦）の微細な本質を考察する方便にも秀でた

以上が『入中論』の解説より、「難勝」と名付けられる第五発心である。

第六発心「現前」

（概論）

1

現前地で心を等引（禅定）にとどめ
完全なる仏陀の法に現前し
〔第6地の菩薩〕は縁起の本質を見ることにより
智慧にとどまって滅を得る

2

一人の視力を持つ者が盲人の集団を
容易に望むところへ導いて行くように
この場合も、智慧〔波羅蜜〕が〔他の波羅蜜の〕功德を取り上げて
〔善逝の地（普光）〕に導く

3

〔菩薩が〕より深遠な教えを理解するのは
経典と他の論理によるものなので
このように聖者ナーガールジュナの
典籍にあるような方法で述べるべきである

4

凡夫であっても、空性について聞くことで
内なる歓喜を何度も繰り返し生じる
歓喜から生じる涙で眼を濡らし
体毛も逆立つ

5

〔第6地の菩薩には〕完全なる仏陀の智慧の種がある
〔この菩薩は〕真如を示すべき器であり
〔この菩薩に〕究極の真理（勝義諦）を示すべきである
〔この菩薩〕には〔空性について聞く〕ことにより功德が生じる

6

常に完全な戒律を取って保持し
布施を實踐し、慈悲心を示し
忍耐を修習する菩薩は
〔それによって積んだ〕善も有情を解放するために悟りに向けて完全に廻向する

7

完全なる菩薩たちに礼拝し
深遠で広大な道に精通する人々は
徐々に歓喜地を得るので
〔歓喜地を〕熱望する者はこの〔修行〕道について聞くべきである

（それ自体から、他から、その両者から、無因からという4種類の不生について）

8

それ自体からそれが生じるのではない。他から〔生じること〕などどうしてありえよう
〔それ自体と他からの〕両者からでもない。無因から〔生じるなど〕どうしてありえよう
それ自体がそれから生じるならば、〔それ自体から生じたものに特別な〕特性はまったく存在しないことになる
生じたものが再び生じることなど、論理にも反している

（それ自体から生じるという戯論を滅する）

9

もし、生じたものが再び生じると考えるならば
芽などのすべての生成をこの世界で見いだすことはできないのであり
種は輪廻の終わりまで生じ続けることになってしまう
それ自体によって、それを消滅させてしまうからである

10

能作因である種とは異なる芽の形や
色、味、能力、異熟などの違いがあなた方にはなくなってしまう
もし、以前のそれ自体の存在を除外して、それ以外の異なるものになるならば
その時、それはそのものの本質でなどどうしてありえようか

能作因：あるものが生じる妨げにならず、それ自体以外の結果を生み出すもの
能作とは行動主体のこと

11

もし、あなたにとって、種と芽がこの世界で異なることがないならば
〔消滅した〕種のように、芽と言われるものを捉えることはできない
あるいは、それらは同一なので、この芽と同じように種もまた捉えられることになってしまう

ゆえに、〔世間的にも〕これを受け入れることはできない

芽は、種の本質それ自体だと捉えることはできない。状態が違うから
また、種と全く別個のものでもないので、種自体の本質でもある
しかし、種が同時に芽の本質だと捉えることはできない

(因と結果が同一だとは世間的にも認められないこと)

12

たとえ因が消滅しても、その結果は見られるのだから
これらは同一であると述べることは、世間においても受け入れられない
それゆえ、事物はそれ自体から生じたというこの仮説は
究極的にも、世間的にも、論理的に成り立たない

13

それ自体から生じることを認めるならば
生じた結果、生じさせる原因、行為、行為者もまた同一であることになる
しかし、これらは同一ではないので、それ自体からの生成を受け入れることはできない
その過失については、〔以下のように〕広大な解説が述べられているからである

A 反論者の他生論

他から生じるという仮説を述べる

B 答えて言う

他から生じるという説を否定する

14

もし、他に依存して、他の何かが生じることになるならば
炎からも深い闇が生じることになり
一切から一切が生じることになってしまう
なぜならば、生み出す〔原因〕ではないものもすべて等しく他のものだからである

A 反論者の主張

必然性があるので、一切から一切が生じることはない。なぜならば、

15

生み出されるものは結果と呼ばれる
およそ何かを生み出すことができるものは、たとえ別のものであっても因である
同じ連続体に属し、生み出すもの(行為者)から生じるため
稲の芽は、大麦などからそのように〔生じるの〕ではない、と言うならば、

B 答えて言う

それは正しくない。必然性の根拠は何かを述べていないからである。

16

大麦の種、ケサラの花の種、キンシュカ(紫梗樹)などは
稲の芽を生み出すとは認められず、そのような能力を持たない
それらは同一の連続体の流れに属さず、同類のものでもない
同様に、稲の種もまた、〔稲の種以外の〕別のもの〔の因〕ではない

17

芽は種と同時に存在するのではない
〔種は芽と〕異なることはなく、種が別のものであることなどどうしてありえよう
ゆえに、芽が種から生じることにはならないので
他のものから生じるという主張を捨てるべきである

A 反論者の主張

種の消滅と芽の生成は同時であるから、種と芽は同時に存在し、異なるものである。

18 abc

天秤棒の両端が上下するのは

同時であると見られるのと同様に

生じるものの生成と生じさせるものの消滅が同時である、と言うならば

B 答えて言う

d

もし同時ならば〔そうだが、〕 この場合は同時ではないので、因果が同時であると言うことはありえない

A 反論者の主張

19ab

もし、生じつつあるものが今まさに生じようとしているなら、それはまだ存在していない

消滅しつつあるものは、今まさに消滅にしようとしているので、それはまだ存在している

B 答えて言う

cd

その場合、これがどうして天秤棒〔の例〕と同じだと言うのか

このような生成には行為者がいないので、論理的な本質がないため成立していない

A 反論者の主張

視覚とともに感覚が生じるのと同様に、因果は同時である。

B 答えて言う

因と果が同時なら、どうして結果が生じるのか

20

もし眼識が、その因と同時に存在する眼や

眼と同時に生じた識別作用など以外のものとして存在すると言うならば

〔眼識〕はすでに存在しているので、〔新たに〕生じる必要がどこにあるのか

〔眼識〕は存在していない、と言うならば、これに付随する過失についてはすでに述べた

21

もし、因が因とは異なる結果を生み出すならば

それは存在する〔ものを生み出す〕のか、存在しない〔ものを生み出す〕のか、その両者〔を生み出すの〕か、あるいはどちらでもないもの〔を生み出すの〕か

もし存在する〔ものを生み出す〕ならば、因がどうして必要なのか、もし存在しない〔ものを生み出す〕ならば、因には一体何ができるというのか

その両者〔を生み出す〕ならば、因には一体何ができるのか、両者のどちらでもない〔ものを生み出す〕ならば、因には一体何ができるのか

A 反論者の主張

22

〔世間の人々は〕自らの見解〔のみ〕にとどまり、世間的な拠り所を受け入れている

ここで倫理を述べて一体何になるというのか

他のものから他のものが生じるということも世間の人々は理解している

ゆえに、他のものから〔他のものが〕生じることが存在するのであり、ここで論理がなぜ必要とされるのか

B 答えて言う

二諦について解説する。

23

諸法には、正しい見かたと偽りの見かたがあり
諸法の本質は二つ〔の様相〕で捉えられている
正しく対象を見るならそれは真如であり
偽りの見かたが世俗の真理であると言われている

24

偽りの見かたにも二種類ある
明らかな知覚能力を持つ者と過失のある知覚能力を持つ者である
過失のある知覚能力を持つ者たちの認識は
すぐれた知覚能力を持つ者の認識に比べると誤り（顛倒）だと認められている

25

障害のない六つの知覚能力（六根）で捉えたものを世間の人々は理解する
世間の中ではそれが真実であり、それ以外のものは
世間の中でも誤り（顛倒）であると規定されている

26

無知の眠りに制圧された非仏教徒たちは
自我の本質を妄分別している
幻、陽炎などに喩えられているものは
世間の見かたにおいてさえ存在していない

27

眼に白内障を患う人の視覚により
白内障のない人の視覚を害することはできないように
無垢の智慧を持たない人の智慧によって
無垢の智慧を持つ人〔の知覚〕を害することはできない

（世俗の真理について）

28

無明により本質が覆われているため、世俗である
それによって作り上げられた真実として現れるのが
世俗諦（世俗の真理）であると牟尼は言われた
〔妄分別によって〕作り上げられたものが世俗諦である

（究極の真理について）

29

白内障の力によって毛髪〔が降る〕などの
顛倒した現れが観察される
真如の本質は、明らかな眼を持った人によって見られる
ここでも同様に、真如をそのように知るべきである

30

もし世間が正しい拠り所となるならば、世間の者は真如を見る
では〔世間の者以外の〕他の聖者たちはどうして必要なのか
聖なる道（八正道）によって何ができるのか
ゆえに、〔世間の〕愚か者は拠り所としてふさわしくない

31

いかなる時も、世間〔の常識〕は正しい拠り所（量）にはならないので
真如を語る時、世間〔の常識〕は〔真如を〕害することはできない
しかし、世間のことが、世間に広く知られている〔常識〕によっ
てもし否定されるなら、世間は害される

32

世間では、ただ種を蒔いただけで
私のこの息子が生まれたと言われている

木もまた植えた、と考えて理解する
ゆえに、他のものからの生成は、世間においても存在していない

33

芽は種と別のものではない
ゆえに、芽の段階で種の消滅はない
しかし、同一ではないので
芽の段階で種があると言うべきではない

34

もし、自相が〔自性、自性によって成立する因や条件に〕依存して生じるならば
自性〔による成立〕はないと考えることによって事物は消滅するため
空性が事物の消滅の因になる
しかしそれは論理に反するので、事物は存在しない

35

これらの事物を分析してみるならば
真如を本質として持つ事物以外に
とどまる所を見出すことはできない
ゆえに、世間において言葉で述べられた真理（世俗諦）を分析するべきではない

36

真如について述べる時
それ自体から、あるいは他から生じることは論理的に正しくない
それは世間の言説においても論理的に正しくない
あなたの言う生成とはどうやって存在することになるというのか

37

事物は空であり、映像などの集まりに依存していることは
広く知られていないわけではない
あたかも、映像などの空なるものから
認識が生じてくるように

38

諸法は空であっても
空性から明らかに生じてくる
二つの真理（二諦）もまた、どちらも無自性なので
それらは常住でもなく、断滅なのでもない

39

自性によってそれ（果報）は消滅しない
ゆえに、アーラヤ識が存在しなくてもそれは存在できるので
時には業が消滅して長い時間がたっても
確実に結果が生じることを知るべきである

40

夢の中で見る対象を見て
覚醒した時も愚か者には執着が生じるように
消滅してしまっても自性がない業にも
結果は存在するのである

41

対象が存在しないのは同じでも
白内障を患っている人は〔存在しない毛髪の現れ〕を見るが
それ以外の事物〔例えばロバの角や石女の息子など〕の現れではないのと同じように
熟した業が再び熟すことはないを知るべきである

42

ゆえに、不善が熟した果報は悪行から〔生じ〕
善が熟した果報は善行から〔生じる〕ことを見て
善・不善のない心を持つ者は解脱するのであり
因果の法について考えることもやめるべきである

43

「アーラヤ識は存在する。人も存在する
蘊などもただ存在するのみである」
というこの教えは、このような仏法の深遠なる意味を
理解できない人たちへの教えである

44

有身見（我執）と離れても
仏陀は我と我のものについて説かれたように
諸法には自性がないことを
有ると未了義の教えとして説かれたのである

（唯識派の見解）

45

客体（捉える対象）がないので捉える主体を見ず
三界はただ意識のみ（唯識）と理解して
智慧に住するこの菩薩は
ただ意識のみ、と真如を理解する

（アーラヤ識はすべての源である）

46

風にかき回されて
海から大波が起こるように
一切の種であるアーラヤ識と言われるものから
自らの力によってただ意識のみが生じた

（依他起性は認識対象がなくても生じ、存在して、一切の戲論がない本質である）

47

それゆえ、依他起性は
仮説された事物が存在するための因である
①外界の対象なしに生じるものであり
②有で、③一切の戲論の対象ではない、という本質を持つものである

依他起性：他のものに依存して生起する性質を持つ現象。因と条件によって生じた一切のもの。

（唯識派の主張を否定し、中観派の見解を述べる）

48

a 外界〔の対象〕を持たない心は、たとえばどこにあるのか
〔とこれについてよく分析してみるべきである〕

A 反論者の主張

b それは夢のようなものである、と言うならば、こう考えるべきである。
〔こうとはどのようにか、と言うならば、〕

B 答えて言う

cd

私にとっては、夢を見ている時でもそのような心は存在しないので
あなたの喩えは受け入れられない

49

もし、目覚めた時に夢を覚えていることにより
心は存在するとするならば、外界の対象もまたそのように〔存在することに〕なる
〔なぜかと言うならば、〕
あなたが「私は見た」と思って思い出すように
外界〔の対象〕に対しても〔記憶が〕存在するからである

A 唯識派の主張

50

眠っている時には眼識は存在しないので
外界〔の対象を捉える作用〕も存在することはなく、意識のみが存在する
その現れを外界そのものであると執着し
夢の場合と同様に、ここでも同じだと主張するならば、

51

あなたにとって外界の対象は夢であり、不生であるように
心もまた不生である
ゆえに、眼、眼が捉える対象、それによって生じた心
この三つもすべて偽り〔の存在〕である

52

残りの耳などの三つ（耳・声・耳識）もまた不生である
まるで夢のように、目覚めているこの時もまた
諸法は偽りであり、心もまた存在していない
享受する対象は存在せず、知覚能力もみな存在していない

53

ここで、眠りから目覚めない限り
〔知覚能力（根）・対象（境）・意識（識）〕の三つは〔夢の中では〕存在する
しかし眠りから覚めると、この三つは存在しない
無知の眠りから目覚めた時も、これと同様である

A 唯識派の主張

白内障の人は存在しない毛髪を見るのだから、外界の対象物が存在しなくても意識は存在する。

B 答えて言う

それも受け入れられない。なぜならば、

54

白内障を患う人の知覚能力による認識では
白内障の力によって髪が降るのを見る
その認識に依って言うならば、〔髪が降る現れとその認識は〕二つとも真理であり
事実を明らかに見る人たちには、二つとも偽りである

55

もし、認識対象が存在しないのに認識が存在するならば
対象となる毛髪と眼には相関関係があり
白内障のない人にも毛髪が降るのが認識されるだろう
しかし、そうではない。ゆえに、〔毛髪が降る現れは〕存在していない

A 唯識派の主張

過去の習気の違いによって、異なる果報が生じる。誰にでも生じるのではない

B 答えて言う

これも正しくない

（意識に習気が実在するならば習気から知覚が生じるが、習気に実体はないので成立しない）

56

〔A ここで唯識派が、〕眼がよく見える人には、習気の力が熟していないので
そのような〔毛髪が降る現れ〕を見る意識は生じない
認識対象は存在するが、事物がないからではない、と言うならば、

B 答えて言う

習気の力は存在しないため、これは成立しない

(どうして習気の力が存在しないのか、と問うならば)

57

生じたものに習気の力があることはありえない
まだ生じていないものにも習気の力はない
特性がないのに特性を持つ者は存在しない
石女の息子にもそれがあることになってしまうからである

A 唯識派の主張

世間の言説として、未生（まだ生じていないもの）に習気の力を認める。

B 答えて言う

それにも意味がない。

(未来の意識は存在しないので、その習気の力がなければ果報は生じない)

58

もし、〔何らかのものが〕生じると述べたいのなら
習気の力が存在しないのだから、それが生じることはない
互いに依存して成立しているものは
〔自性が〕成立しないものばかりであると聖者たちは言われた

59

もし、消滅した習気の力の果報から生じるならば
他の習気の力から他〔の意識〕が生じることになる
〔なぜならば、あなたにとって、〕
連続体の流れを持つものは、互いに異なるものとして存在している
ゆえに、一切はすべてから生じることになる

A 唯識派の主張

60 abc

もしその場合、連続体の流れを持つものが異なっても
それらの連続体の流れは異なるないので
それに過失はない、と言うならば、これを立証するべきである

B 答えて言う

d 異なる連続体という場合は、ありえないからである

61

マイトラとウパグプタが依存している諸要素は
他の本質ものものなので、同じ連続体に含まれているのではない
何でも自相によって個別であるもの
それらが同じ連続体に含まれるということは不合理である

(唯識派ディグナーガの主張：アーラヤ識の種が外界として現れる)

A 唯識派の主張

62

自らの習気の力によって眼識が生じ
その一瞬にすべてが生じてくる
自らの意識の土台である習気の力が
眼という物質的存在をそなえた知覚能力であると理解するべきである

63

ここで、知覚能力から生じた意識が
外界の対象物を捉えるのではなく

自らの種から青などの現れが生じることを理解しないため
人は外界の対象を心だと受け入れる

64

夢の中では、色（しき：物質的存在）という他の対象がなく
自らの習気の力が熟した果報から
その現れである心が生じるのと同じように
覚醒時にも外界の対象は存在せず、意識だけが存在する、と言うならば、

B 答えて言う

そうではない。なぜならば、

65

夢の中では視覚が存在しないので
青などの現れが心として生じるように
視覚能力がなければ、自らの〔アーラヤ識の〕種が熟して現れるのだから
ここで、盲人にはどうして〔その現れが〕生じないのか

A 新唯識の主張

果報としての姿形であるから、生じない。

B 答えて言う

それも正しくない。なぜならば、

66

もし、あなたが言うように、
夢の中で第六識（意識）が熟し、覚醒するとなくなるならば
第六識が熟しているのにどうしてここに〔果報が〕ないのか
このように、夢の中では〔果報が〕ないと言うのが、どうして不合理なのか

67

〔盲人に〕眼がないことが〔覚醒時の視覚の〕因ではないように
夢の中でも眠りは因ではない
ゆえに、夢の中でも、〔夢の〕視覚〔とその対象物〕は
偽りであり、妄分別の因として受け入れられている

（唯識派の問答の要約）

68

この人があれこれと答え
かれこれと述べたのは〔唯識派の〕主張に等しいとみられるので
この問答は退けられた
諸仏は実体があるとは決して説かれなかったからである

A 唯識派の主張

瑜伽行者（修行者）たちが骸骨に満ちた大地を完全に見るのはどうしてかと言うなら、

B 答えて言う

境・根・識は不生である。知覚対象がないのと同様に意識も存在しない。

69

瑜伽行者たちが師（ラマ）の教えにより
骸骨でいっぱい大地を見て
これらもまた、〔境・根・識は〕三つとも不生であると見ているが
〔この禪定は真如ではない〕顛倒したものに心を従事させているので、〔誤った瞑想である〕と
示されているからである

70

あなたにとって、知覚能力の対象を見て
このように、醜さに心を向けて
そのような対象に心を一点に向けるなら
理解したことは、偽りにはならない

71

白内障を患う知覚能力を持つ因と同様に
川の流れを餓鬼たちが血膿と認識することも
要約すると、このように認識対象は存在しないのであり
意識もまた存在しない、というこの意味を知るべきである

(自己認識・自証分の否定)

72

もし、認識対象も、それを認識する主体者もなく
この両者が空という他の力に支配される事物として存在しているならば
これが存在するとどうやって知ると言うのか
認識されないのに存在するというのは正しくない

(唯識派のディグナーガの主張：自己認識なしに記憶を説明することはできない)

B 答えて言う

73

それ自身がそれ自体を体験することは成立しない
もし、のちの記憶によって成立する〔とあなたが言う〕ならば〔そうではない〕
成立しないことを立証するために述べると
成立しないことがそれを立証するのではない

74

自己認識(自証分)が成立するのは受け入れられるとしても
記憶が思い出すというのは不合理である
それら(記憶の意識と対象を体験した意識)は別のものだからであり、知らない人の〔意識の〕
連続体の流れに生じた〔記憶〕のようなものだからである
この理由により、〔自己認識の〕様々な特性も滅される

A 唯識派の主張

中観派は記憶をどう説明するのか

B 答えていう

75

対象を体験すること、それを思い出すこと
それは別のものとして私に存在するのではない
ゆえに、私は見た、と考えて思い出すのであり
これもまた世間の言説という慣習である

76

ゆえに、自己認識は存在しない
あなたは依他起性を何によって捉えているのか
行為者、行為の対象、行為は同一ではないので
それ自体がそれを捉えるというのは論理に反している

77

〔ゆえに、自己認識は存在しないので〕
もし、不生であり、未知の実体を持つ
依他起性の本質が存在している〔と認める〕ならば
存在することが認められない石女の息子が
他者を害することなどどうしてあろうか

(唯識派は二諦を逸脱している)

78

依他起性が少しも存在していないなら
世俗の真理(世俗諦)の因は何であろうか
他の者たち(唯識派)のように実体に執着することで
世間に知られている一切の規定も破壊されてしまう

79

阿闍梨ナーガールジュナの足元の道の外に外れると
寂静への方便は存在しない
それらの者たちは世俗諦と勝義諦から退転し
そこから退転すれば解脱の成就是存在しない

(二諦は涅槃の因)

80

方便となる世俗諦
方便から生じた勝義諦
この二つの分類を知らない者たちは
誤った分別により悪い道に入る

81

あなたが依他起性の実体を主張するように
私は世俗諦も受け入れていない
しかし結果のために、これらが存在しなくても
存在すると世間に向かって私は述べる

82

[もしこの世間が]
五蘊を滅して寂静に入った阿羅漢たちにはないのと同様に
世間にもないならば、この世間の観点からも
存在するとは私は言わない

83

もし世間があなたを害さないならば
世間そのものに依存してこれ(依他起性など)を否定するべきである
あなたと世間はここで論議し
のちに力のある方に私は依存しよう

A 唯識派の主張

世間の慣習を破壊するのを恐れてあなたが世間を認めるなら、心だけでもあることを認めるべきである。『十地経』に、三界唯心と説かれているから。

B 答えて言う

三界唯心は、永遠なる自我を否定するための教えに過ぎない。

84

「現前地」に直面した菩薩は
三界は唯識のみ、と理解して
常住なる自我を否定して理解を得るために
行為者はただ意識のみ(唯識)であると理解する

85

ゆえに、知性ある者たち(菩薩)の心を高めるため
『入楞伽経』に、一切智者は
非仏教徒たちの高峰を克服するお言葉の本質を持つ金剛で
この真意を見抜くために説かれた

(その解釈は次の通り)

86

〔非仏教徒たちの〕様々な論書に
非仏教徒たちが人など〔について語ったものを〕
創造主とはご覧にならず
勝利者は、ただ意識のみがこの世の創造主であると言われた

87

真如〔の理解を〕高めた方が仏陀と言われるように
ただ意識のみが主であるとする世間を
経典では「ただ意識のみ」と説かれている
ここで色（物質的存在）を否定することは、経典の意味ではない

（この唯識派の主張のように）

88

もし、これらは「ただ意識のみ」と理解され
それ（『十地経』）の中で色（物質的存在）を否定され
再びそれ（『十地経』）の中で、大いなる本質を持つ方（仏陀）は
心は無明と行為から生じる、とどうして説かれたのか

89

心こそが非常に多様な有情世間（有情の住む世界）と
器世間（環境世界）を形成する
一切有情は行為から生じると説かれた
心を断じれば、行為も存在しない

90

もし、色（物質的存在）が存在しても
そこに心のような創造主が存在するのではない
心以外の創造主は否定しても
色（物質的存在）を否定しているのではない

（有と無に関して、）

91

世間の真実にとどまる者には
〔五〕蘊は世間であり、五つ部分（集まり）がある
真如の智慧が立ち現われることを望む瑜伽行者には
この五つは生じない

92

色（物質的存在）がないなら、心はあると捉われてはならない
心だけはあるが、色（物質的存在）はないと捉われてはならない
これらを『般若理趣経』で 仏陀は〔どちらも〕等しく存在しないと断じられ
アビダルマでは〔ともに存在する〕と説かれた

93

〔ゆえに、このように経典と論理が立証する〕二諦のこの段階を壊しても
あなた（唯識派）の実体はすでに否定されたので成立していない
ゆえに、この段階で、事物は無始の時から真実として不生だが
世間においては生じると知るべきである

A 唯識派の主張

この経典ではそうでも、『入楞伽経』には、識だけがあると言われている。

B 答えて言う

唯識の経典は執着を滅するための未了義の経典である。

94

いかなる経典にも、「外界の現れは存在しない。心が様々に現れる」

と述べられている

色（物質的存在）に非常に執着する人たちには

色（物質的存在）はないと否定されるが、これもまた未了義に他ならない

95

師が、これは未了義に他ならないと言われても

これが未了義に他ならないことを論理によって受け入れるべきである

〔この経典が未了義であるだけでなく、他の〕そのような種類の他の経典も

未了義に他ならないことをこの経典によって明らかにするべきである

96

「認識対象がなければ、認識を取り除くのは容易である」

と諸仏は説かれた

認識対象がなければ認識を遮断できるので

まず第一に、認識対象を遮断されたのである

97

このように、経典の由来を知って

真如でない意味を説く経典は

未了義だと理解して〔真義〕を導き出すべきであり

空の意味を説くものは了義であると知るべきである

A ジャイナ教の主張

それ自体だけから、他のものだけからの生成は認めない。

B 答えて言う

98

〔自他〕両者から生じるということも論理に反する

なぜならば、すでに述べた通り、これらの過失が降りかかるからである

これは世間においてもそうではなく、真理としても受け入れられない

〔自他〕それぞれから生じるということも成立していないからである

A 無因論の主張

すべてのものは自然に因無くして生じる。

B 答えて言う

無因からの生成は存在しない。

99

もし、無因からのみ生じると考えるなら

その時すべては一切からも生じることになり

結果を生むために

世間では種などを何百も集める必要もなくなる

100

もし、有情に因が存在しないなら

〔存在しない〕虚空のウッパラ（優曇華）の花の匂いや色のように、認識されることはなくなる

しかし、非常に多様な世間が認識されることにもなる

ゆえに、自らの意識のように、世間は因から生じると知るべきである

A 無因論者の主張

世界は無因で自然に生じる。

業も来世もない。今がよければそれでいい。

B 答えて言う

業も来世もないと言うならば、無因論は崩壊する。

101

〔四つの真実と言われる〕構成要素（四大）は、
どんな本質であってもあなたの意識の対象となる
〔四大が〕その本質を持つものでないならば
心が深い闇の中にある者はどうやって彼岸を完全に理解できると言うのか

102

彼岸を否定する時
認識対象には自性があると誤って理解していることを知るべきである
四大には実体があると受け入れているように
その種の見解（実体への捉われ）の土台と同じ種類のからだを持っているからである

（そこで答えて言う）

103

これらの四大は、そのように存在しないとすでに説明したので
以前に、自から、他から、その両者からの生成と、無因は
共通に否定したので説明しないが
これらの四大は存在していない

（四つの場合における生成の否定）

104

〔事物の自性は不生であると示すために〕
自から、他から、その両者からの生成や
因に依存せずに存在することはないので、諸法には自性〔による成立〕がない
世間には雲の集まりと同じような深い無明が存在するため
すべての対象は顛倒して現れる

105

白内障の力により、ある人には毛髪が降り、月が二重に見える
孔雀の色模様、蜜蜂なども顛倒して捉えるように
賢くない者たちは無明という過失の力で
様々な有為法を自らの知性で〔実体として〕理解する

106

無明によって行為が生じる。無明がなければ〔行為は〕生じないと賢くない者だけが理解する
賢者たちは、善き知性という太陽で深い闇を完全に晴らすように空を理解して解脱に至る

A 反論者の主張

107

もし事物が真実として存在しないなら
世間の慣習においても、石女の息子のように
それらは存在しないことになる
ゆえに、それらは自性によって存在しているに他ならない

B 答えて言う

108

白内障を患う人などの対象となる
毛髪が降るなど〔の現れ〕は不生である
まず、それこそを論議するべきであり
そのあとで、無知という白内障を患う人たちに反論するべきである

109

もし、夢やガンダルヴァ（食香）の都市

蜃気楼の水、魔術による映像などが
不生であると見たならば、存在しないのは同じであり
あなたにとって、このようになるのがどうして不合理なのか
110

これが真実として生じていなくても
石女の息子のように
世間で見られる対象とならないのではない
ゆえに、この発言は確かではない

111
石女の息子に、自らの本質による誕生が
世間においても、真実としても、存在していないように
これらの事物のすべては自性による成立として
世間においても、真実としても、不生である

112
ゆえに、師はこのように、
「諸法は無始の時より寂靜で、不生で、
本質的に完全に涅槃である」と言われた
ゆえに、いかなる時も生成は存在していない

113
これらの水瓶などは、真実として存在しているのではない
しかし世間では、存在するとして広く知られている
そのように一切の事物は〔同じ〕なので
石女の息子と同じにはならない

A 反論者の主張

不生なら、因果関係はどうなるのか

B 答えて言う

114
無因、自在天の因などと
自から、他から、その両方から
事物が生じるのではない
ゆえに、〔他のものに〕依存して生じてくる

115
事物は〔他に〕依存して生じるので
〔自ら生じるという〕これらの妄分別を考察することはできない
ゆえに、この縁起の論理によって
悪い見解の網をすべて断ち切るべきである

116
妄分別は、事物が存在するならば生じる
事物がどのように存在しないかをよく分析し
事物がなければ、これらは生じなかったように
たとえば、薪がなければ火も存在しないのと同様である

117
凡夫たちは妄分別に縛られ
妄分別のない瑜伽行者は解脱する
妄分別を退けるいかなるものも
よく分析した結果だと賢者たちは説かれた

(妄分別を滅するための『中論』による否定)

118

論書の中の分析は、問答への執着から書いたのではない
解脱〔に導く〕ために真実を示した
もし、真実を完全に解説して
他の典籍を破壊したとしても過失はない

119

このように、自らの見解に執着し
同様に、他者の見解に惑わされることはまさに妄分別であり
それゆえ、執着と怒りを断滅し
よく分析する者はいち早く解脱する

120

「煩惱など過失のあるものは
残らず有身見から生じる」と心で見
自我はこの対象であると理解し
瑜伽行者は自我を否定する

121

我とは、「食べる者、常住の者、創造主でない者、
功德と行為を持たない者」と非仏教徒たちは妄分別する
そのわずかな違いに依存して
非仏教徒たちの学派は異なっている

(非仏教徒のそれぞれの教義における自我が語られたが、それは、)

122

石女の息子のように不生であるため
そのような自我は存在していない
これは我執の拠り所としても不合理であり
これは世俗においても存在するとは認められない

123

それぞれの論書による〔自我〕の特性を
非仏教徒たちが示した
そのすべては、彼らに馴染みのある不生という根拠によって否定されたので
そのすべての特性は存在していない

124

ゆえに、〔五〕蘊と別個の自我は存在しない
〔五〕蘊以外に〔自我〕を捉えることは成立しないからである
世間は〔自我を〕我執の拠り所とも認めない
それを知らない人も自我を見るからである

125

畜生として何劫にも渡って生まれた者でさえ
不生で常住な〔自我〕を見たことがない
しかし、彼らもまた、我執に捉われるのが見られる
ゆえに、〔五〕蘊と別個の自我はまったく存在していない

(自我は五蘊と同一であるという主張の否定)

126 〔これに対する仏教徒の説は、〕

〔五〕蘊と別個の自我は成立しないので
自我の対象は〔五〕蘊に他ならない
〔説一切有部の18学派の一派である正量部では、〕
ある人は自我の土台を五蘊のすべてだと主張し
ある人はひとつの心だと主張する

127

もし〔五〕蘊が自我ならば、それは複数なので
自我なども複数になってしまう

自我とは実体となるものであり、それを見ることは
〔五蘊の〕実体に従事することなので、間違っただ見解にはならない
128

涅槃に至った時は、確実に自我〔の連続体〕は途切れる
涅槃に至る前は、一瞬のうちに生じ、滅するので
行為者は存在しないため、その果報はない
他者が積んだ業は、他者が食むことになる

A 反論者の主張

その連続体の流れは一つなので、我々に過失はない。

B 答えて言う

129

「真実として連続体が存在するならば、過失はない」と言うならば
前に分析した時、連続体についての過失は説明した
それゆえ、〔五〕蘊と心は自我としては不合理である
世界の果てがあることなどないからである

(サーンキヤ学派の主張：プルシャ（人、真我）について)

130 ab

あなたの説では、瑜伽行者が無我を見る時
確かに事物は存在しなくなる

A 反論者の主張

事物が存在しないことにはならない、と言うならば

B 答えて言う

cd

常住の自我を断じた時、それによって
あなたの心、あるいは〔五〕蘊は自我ではなくなってしまう

A 反論者の主張

そのようなものとして自我を見ていないので、過失はない。

B 答えて言う

それはありえない。内的精神が自我で他の部分では諸蘊が自我であると分けるのは不合理である

A 反論者の主張

無我を見ている時、五蘊に自我という言葉を使うことはありえない。

B 答えて言う

それもありえないが、それでも五蘊に対して自我という言葉を使うなら、

131

あなたの説によると、瑜伽行者は無我を見て
色（物質的存在）などの真如を理解することはない
色（物質的存在）を見て〔それに心が〕従事するため執着などが生じる
その本質を理解しないからである

A 反論者の主張

五蘊が自我である

B 答えて言う

132

師は「〔五〕蘊が自我である」と言われたため、

〔五〕蘊が自我であると主張するならば
それは〔五〕蘊と別個の自我を否定することになる
「色（物質的存在）は自我ではない」などと、他の經典に説かれているからである

A 反論者の主張

どうしてそう言えるのか

B 答えて言う

133

なぜならば、「色（物質的存在）、受（感受作用）は自我ではない。
想（識別作用）も〔自我〕ではなく、行（形成力）も識（認識作用）も〔自我〕ではない」
と他の經典に述べられているからであり
要約して示すなら、五蘊は自我であると述べているのではない

A 反論者の主張

134 ab

「五蘊が自我である」と述べる時、
諸蘊の集まり〔が自我なの〕であり、〔五〕蘊のそれぞれ〔が自我なの〕ではない

B 答えて言う

cd

守護者でもなく、鎮圧者、あるいは証人でもないので
〔自我は〕集まりでもない

A 反論者の主張

自我を守護者、鎮圧者、あるいは証人と考えるのは合理的である

B 答えて言う

それはありえない。なぜなら過失についてはすでに述べたからである。

135

その時、その各部分が集まって馬車になるのであり
馬車と自我は同じである
經典には、「〔五〕蘊に依存して」と説かれているように
単なる〔五〕蘊の集まりが自我なのではない

A 反論者の主張

「自我は 必要な要因をただ集めた集合体ではない」と言うのは不確かなことである。

B 答えて言う

それもありえない。水瓶などはただの物質的存在の集まりにはならないので、自我も同様である。

A 反論者の主張

ただの部品の集合体が馬車なのではない。

B 答えて言う

136

「〔自我は〕形である」と言うならば、〔自我は〕色（物質的存在）にあることになる
ゆえに、あなたにとってはそれ（色＝からだ）のみが自我になるため
心などの集まりが自我の本質になるのではない
なぜならば、それらには形がないからである

137

取る者と取られる物が同一であるというのは不合理である
もしそうならば、行為と行為者が同一になってしまうからである
「行為者は存在せず、行為はある」と考えるなら

そうではなく、なぜならば、行為者がなければ行為はないからである

138

牟尼は、自我を

地・水・火・風・識・空

と言われる六界と

〔知覚能力（根）・対象（境）・意識（識）が〕接触する土台となる眼などの六つの知覚能力（六根）に依って示された

139

〔牟尼は、〕心（心王）とそれに伴って派生する心の働き（心所）をよく把握して説かれたゆえに、それ（自我）は〔六界・六根〕のそれぞれではなく

〔六界・六根〕そのものでもなく、単なる〔六界・六根〕の集合体でもない

それゆえ、我執の〔対象は〕これらに存在していない

140

無我を理解した時、常住の自我を滅しても

〔自我〕を我執の土台と認めなければ

「無我の智慧で我見を断つ」と述べることは非常におかしいことである

141

自分の家の壁穴に蛇がいるのを見て

「ここに象はいない」と言っつて疑いを晴らし

蛇への恐怖も捨てたなら

ああ、他人の笑い者になるだけである

142

五蘊に自我があるのではなく、自我に五蘊があるのでもない

諸蘊は存在せず、この二つ（五蘊と自我）が他の性質のものとして存在しているならば

〔依存するものと依存されるものとして〕考えられることになる

しかし他の性質としては存在していないので、このように考えるのは妄分別である

143

自我は色（物質的存在）だとは認められない

なぜならば、自我は存在しないので、何かを持つことはないからである

〔持つ者と持ち物が〕異なる時は、牛を持ち、異なる時は、色（物質的存在）を持つ

自我は、色（物質的存在）自体であることも、異なる性質であることもない

（実在論のまとめ：我見二十種・二十有身見）

144

①色（物質的存在）は自我ではなく、②自我は色（物質的存在）を持つものではない

③色（物質的存在）に自我は存在せず、④自我にも色（物質的存在）は存在しない

このように四種〔の論理〕によって諸蘊を知るべきである

これらは我見二十種（二十有身見）として受け入れられている

A 反論者の主張

『中論』で、5つの考察がされているのだから、5蘊 x 4つの論理 = 20になるはずなのに、我見二十種と言うのはなぜか。

B 答えて言う

有身見の種類は經典に定められており、第五の論理を異なる主張として説くのは、非仏教徒の主張を否定するためである。

145

有身見（我見）という〔二十の〕高峰（我見二十種）は

無我を理解する金剛によって克服され、自我とともに消滅する

〔自我とともに消滅するのは、〕堅固で高く聳える有身見という山の頂となる

これら〔我見二十種〕であると知るべきである

(説一切有部 18 部一派である正量部は、人は実在すると主張する)

146

ある人は、同一・別異、常住・無常など
言葉では述べられない人の実体があると主張し
それを六つの意識の認識対象であると主張し
それを我執の土台であると主張する

A 正量部の主張

147

色(物質的存在)に対して、心は言葉で表現できないので理解できない
事物は存在するが、言葉で表現できないので理解できない
もし、自我が実体として僅かでも成立しているならば
心のように、成立する実体は言葉で表せないものにはならない

148

あなたにとっては、水瓶は実体として成立していないので
その自性を色(物質的存在)などによって表現することはできない
ゆえに、自我を五蘊によって表現することはできず
それ自体からの存在が成立していると理解するべきではない

(これに対して、中観派が正量部の説を否定する)

149

あなたの説では、[実体のある]意識はそれ自体の本質と別個のものであることを主張せず
色(物質的存在)などとは異なる事物であると主張している
事物にはこの二つの現れが見られる
ゆえに、自我は存在しない。実体がないからである

(馬車の喩え：自我は単に仮設されたものであり、実体がない)

150

ゆえに、我執の土台は事物ではない
それは五蘊と別個のものでもなく、五蘊の本質[を持つもの]でもない
五蘊の土台でもなく、その土台を持つものでもない
これは五蘊に依存して成立している

151

馬車は、それ自体の部分とは別のものだと主張しているのではない
他のものでないのではなく(同一であり)、それ(部分)を持つものでもない
[馬車]部分にあるのではなく、部分が[馬車]にあるのもない
その単なる集まりでもなく、形でもなく、そのようなものである

「七つの論理」：同一、別異、依存するもの、依存される土台、所有、集合、形

152

集合体であるというだけで馬車になるのではない
ばらばらの状態でも馬車があることになってしまうからである
部分を持つ[全体の形が]なければ部分はなく
形だけを馬車であるというのも不合理である

153

あなたは、以前(馬車の形になる前に)それぞれの部品として存在していたものが
馬車に組み立てられた時もそのような[部品の形としてある]のと同じように
[馬車を]分解した時、それぞれ[の部品]には[馬車は存在しないのだから]
そのような[馬車の形になった]時も、馬車は存在するのではない

154

今、もし、馬車であるこの時
車輪などの形が〔以前と〕異なっているならば
これを認識するだろうが、〔形の変化〕も存在しないので
〔様々な部品の〕形のみで馬車が存在するのではない

(それでも正量部が、車輪などの集合体の形が馬車である、と言うならば、)

155

あなたのいう集合体は、まったく存在しないので
形は部分の集合体ではない
なんでもないものに依存して
これを形あるものとするなどどうしてあろうか

(それでも正量部が、虚妄であっても、集合体になることで虚妄な形になる、と言うならば、)

156

あなたがこのように主張するように
真実でないものの因に依存して
真実でない自性を持つ
一切の結果の現れもまた生じると知るべきである

157

これにより、色(物質的存在)などそのようにとどまっているものに対して
水瓶だと捉える意識〔が生じるということ〕もまた道理に反している
生じることがないので(不生)、色(物質的存在)などもまた存在していない
ゆえに、これらに形があるというのは不合理である

A 反論者の主張

「七つの論理」で追及すると馬車は存在しないが、馬車を呼ぶ、馬車を直す、などというので慣習によって馬車は存在する。

B 答えて言う

この過失はあなたにある。「馬車を呼ぶ」「馬車を修理する」というような世間の言説がどうしてあなたに成立するのか。

158

それは、真実としても、世間においても
「七つの論理」によって成立していない
しかし、分析せず、世間のあるがままには
自らの部分に依存して仮説される

159

それ(馬車)自体が部分を持つものであり、部品を持つものである
馬車自体が〔馬車を〕作った行為者と言われ
〔車輪などを取り上げる行為に依存して〕人々には取り手として成立する
世間に広く知られる世俗を破壊してはならない

(自我を単なる仮説と受け入れることの利点)

160

「七つの論理」によって存在しないものが、どのようにあるのかと言うと
瑜伽行者はその存在を見つけない
これにより、勝義においても容易に〔真如を〕見抜くことができるので
ここではこのように成立していると受け入れるべきである

A 反論者の主張

瑜伽行者は馬車を知覚しなくてもよいが、部品集合体だけを知覚することがある。

B 答えて言う

あなたは布を焼いて灰の中に糸を探す笑われるべき人である。なぜならば、

161

馬車がまさにあるのではないならば、その時部分を持つものはない
その部分さえない

馬車が焼けてしまったら、部分さえないという喩えのように
意識の火で部分を持つものを焼くと、部分も焼かれる

(自我と行為の仮説)

162

同様に、世間でよく知られていることにより、
〔五〕蘊、〔十八〕界、同様に、六処に依存して
自我もまた取る〔行為をする〕者として認められる
取ることは行為であり、これは行為者でもある

163

事物は〔実体として〕存在しないので、これは堅固なものではない
堅固でないからこそないのであり、これは生じることも、滅することもなく
これには常住などもなく
同一であることも別異であることもなく

164

常に有情には我執の心が生じ
それによって何らかのものに
我執の心が生じる
その自我は、分析しない時、よく知られているものとして無明から生じる

A 反論者の主張

なぜ我執（私への執着）がなければ、我所執（私の物への執着）もないのか。

B 答えて言う

165

行為者のない行為はない
ゆえに、我所執（「私のものへの執着」は我執（私に対する執着）がなければ存在しない
ゆえに、我執と我所執の空を見て
瑜伽行者は解脱に至る

166

水瓶、毛織物、盾、軍隊、森、数珠、樹木、家庭、馬車、宿などの事物は何でも
そのように〔考察せず、よく知られているものとして、〕何らかの観点からこの生においてそう
呼ばれるのであり、それを理解すべきである
なぜならば、牟尼は世間と論議されないからである

A 反論者の主張

世間の事物はどんな表現によって表されるのか

B 答えて言う

それを示すために言う

167

部分、特性、食欲、相（特徴）、薪などと
部分を持つもの、特性を持つもの、食欲を持つ者、相（特徴）を持つもの、火などは同義である
これらは馬車を分析したから「七つの論理」があるのではなく

それとは別に、世間に知られている慣習から存在しているのである
(世間の慣習だから分析しない)

(部分が相互に依存しているだけでなく、世間の慣習として因果が成立する)

168

もし因によって、生み出されるべき対象が生み出されるならば、それは因である
もし結果が生じなければ、それは因ではなく、〔結果は〕因を持たないことになる
因があるならば結果が生じるのであり
何から何が生じるか、何が先に生じるかを述べてみよ

(もし、因が果を自性によって生み出すなら、出会ってからか、出会わずに生じるのか?)

169

あなたの説では、もし、因に出会うことで結果が生じると言うならば、
その時〔因と果〕は一つの力であり、生み出される結果は〔因と〕別のものではなくなってしまう
もし〔因と果が〕別個のものならば、因と因でないものに何の違いもなくなってしまう
この二つを排除すると、他の概念は存在していない

170 ab

あなたの説では、もし、因によって結果が生み出されず
そのため結果と言われるものが存在しないなら、結果を生まない因は、因を持たないものとなり、
あるのでもない

A 反論者の主張

では、あなたの説ではどうなるのか?

B 答えて言う

cd

ゆえに、この二つ(因と果)はともに幻のようなものである
私に過失はなく、世間の諸法も存在する

A ある人の反論

何らかの因が結果と出会って生み出すのか? それとも出会わずに生み出すのか?

171

このあなたの論駁は、論駁対象と出会って論駁するのか、出会わずにか?
というこの過失は、あなたにも当てはまるのではないのか?
このように述べられた時、自分の側の主張のみ論駁されるなら
その時あなたの論駁は、論駁対象を論破することはできない

172

自分の言葉にさえ等しく当てはまる誤った答弁によって
正しい論理がないので事物のすべてを虚無としてしまうため
あなたは聖者たちによって認められることがない
あなたには自派の主張がないため、何も論破せず批判するだけになってしまう

173

「論駁が論駁する対象と出会わずに論駁するのか、
出会って論駁するのか」と述べた過失は
ここで確かな自派の主張がある人には〔何らかの過失に〕なるが
私にはこの主張がないので、この過失に陥ることはありえない

174

たとえば、あなたが太陽にある〔日食などの〕様々な特性を
日食などの時に〔水面に映った〕映像の中にさえ見るならば
太陽と映像の現れが出会うか出会わないかを〔分析すること〕は不合理である

しかし、依存することにより、単なる世間の慣習として生じる
175

同様に、真実ではなくても
自分の顔を美しくするためにそれ（映像）が存在するように
ここでも智慧の顔を磨くための力が見られるという理由によって
過失を離れて立証対象を理解するべきだと知るべきである

（ここで、自立論証派の反論）

A 反論者の主張

私たちの言葉に偽りはなく、論駁の余地はない

B 答えて言う

それは答えになっていない

176

もし、自分の立証対象を理解させる根拠が実際に成立し
実際に理解する対象となるものが立証対象の本質として存在しているならば
会うかどうかなどの論理に関連させると
それもまた存在していないので、あなたが失望するだけである

177

一切の事物は実在しない、と他者に理解させる力は大きく、容易である
しかし、他者に事物の実体を理解させる力は
それほど大きくないので容易ではない
悪い論理の網によって、あなたはどのようにしてここで世間を陥れるのか

178

以前に示した 残りの論駁も理解するべきである
会うことなどの主張に対してもここで答えよう
論駁する人は誰もいないので
残りの論駁は以前に説明したこの主張によって理解するべきである

（空性の分類を示す：四空、十六空）

179

この無我は、一切有情を解脱させるため〔に説かれた〕
法無我と人無我に分けて、二つの分類があると説かれた
このように、師は再びこの教え（二つの無我）を分類して
弟子たちに多く〔の教えを〕説かれた

180

戲論とともに十六の空性を説かれ
それを再び要約して
四つ〔の空性〕を説かれた
これらは大乘においても説かれている

181 (1) 内空性

その自性はそれ（空性）であり
眼は眼〔の自性が空なので、それ〕によって空であり
耳、鼻、舌、体、
意識もまた同様に述べられている

182

常住にとどまることなく
消滅することもないので
眼などの六つのもの（眼・耳・鼻・舌・体・識）は
無自性である

183 a

これが内空性と認められている

A 反論者の主張

事物を少しも認めず、作られたものではなく、他に依存しない自性を認めるあなたは、矛盾を述べている。

B 答えて言う

あなたは『中論』の真意を理解していない。

A 反論者の主張

火の熱さは存在するのだから、作られたものではなく、他に依存するものではない。

B 答えて言う

眼などは自性空性であり、相対的な空性ではない。

183 bcde (2) 外空性

その自性はそれ（空性）だから

色は色〔の自性が空なので、それ〕によって空であり

声・香・味・触・法も

同様である

184 ab

色などの無自性は

外空性と認められている

cd (3) 内外空性

〔内と外の〕二つともに自性がないということが
内外空性である

185 (4) 空性空性

諸法に自性がないことを

賢者たちは空性と述べられた

空性もまた、空性〔の自性が空なので、それ〕によって空であり

空性空性であると認められている

186

空性と言われる空性が

空性空性として認められている

空性には実体があると考える人たちの

捉われを断じるために説かれたのである

187 (5) 大空性

有情世間（有情）と器世間（環境世界）は

余すところなく遍在する

無量の喩えによって限りがないので

すべての方角は非常に大きい

188

これらの十方位が

空性であることが

大空性であり

大きいという捉われを断じるために説かれた

189 (6) 勝義空性

それ（勝義）は最勝なる目的なので

勝義であり、涅槃である

それ（勝義）はそれ（勝義）〔の自性が空なので、それ〕によって空であり
勝義空性であると言われる

190

涅槃に実体があると考える人の
捉われを断じるために
勝義を知る方（一切智者）は
勝義空性を示された

191 (7) 有為空性

縁（条件）から生じたため
三界はみな有為法であると必然的に述べられた
それ（有為法）はそれ（有為法）〔の自性が空なので、それ〕によって空であり
これを有為空性であると説かれた

192 (8) 無為空性

生成（生）・維持（住）・無常
それらが存在しないのが無為法である
それ（無為法）はそれ（無為法）〔の自性が空なので、それ〕によって空であり
これを無為空性と言われた

193 (9) 無辺際空性

終わり（辺）が存在しないこと
それが無辺際であると言われている
そのような空性が
無辺際空性と述べられている

194 (10) 無始無終空性

最初の始まりと最後の終わり
それが無いので輪廻には
始まりもなく終わりもないと言われている
195
去ることも来ることもないので
夢のようであり
この生存はそれ（去来）から離れているので
それは無始無終空性であると言われている

196 (11) 無散空性

捨てるとは分散、放棄であると
明らかに述べられている
無散とは捨てないことであり
無散はその自性が空である
197
無散は無散〔の自性が空なので、それ〕によって
自性が空である
それゆえに
無散空性と言われている

198 (12) 自性空性

有為法などの本質は
諸弟子（声聞）、独覚
菩薩、如来などによって
作られたのではない

199

ゆえに、有為法などの本質を
自性と〔いう名で〕述べている
それ（自性）はそれ（自性）〔の自性が空なので、それ〕によって
自性空性と言われている

200 (13) 一切法空性

十八界と六触
それから生じる六つの感覚
色（物質的存在）、色でないもの
同様に、有為法、無為法の諸法

201 ab

これらの諸法一切は
それら〔の自性〕から離れているので一切法空性と言われる

cd (14) 自相空性

知覚能力の対象など実体のないもの
その自相は空である

（色などの自相は何か、それを一般的に述べると）

202

物質的存在（色）は「知覚能力の対象となるもの」という自相を持つものであり
感覚（受）を味わうという本質を持つ
識別作用（想）の相を維持し
形成力（行）は実際に形成する〔相を持つ〕

203

対象を個別に識別するもの
それが認識作用（識）の相（特徴）である
〔五〕蘊は苦しみの相を持ち
〔十八〕界の本質は毒蛇だと認められている

204

〔六〕処を仏陀は
〔苦しみを〕生じる扉の本質だと説かれた
他に依存して生じたもの
それは集まり、出会う（集合）という相〔を持つもの〕である

205

捨は布施波羅蜜〔の相〕
戒は苦しみが無いという相
忍は怒らないという相
精進は罪過が無いという〔相を持つ〕ことである
（精進は、善を完全に維持するという相を持つものだからである）

206

禪定は集中の相を持ち
智慧は執着が無いという相〔を持つ〕
これらが六波羅蜜の相である
と述べられている

207

〔四〕禪、〔四〕無量、
同様に、他の〔四〕無色〔定〕
これらを正しく知る人は
錯乱が無いという相を持つと〔世尊は〕説かれた

欲界：第1の境地

色界の四禪：初禪（第2の境地）から第四禪（第5の境地）まで

無色界の四つの禪定：第6の境地から第9の境地まで

第6の境地：空無辺処（無限空間の境地）

第7の境地：識無辺処（無限意識の境地）

第8の境地：無所有処（何も存在しない領域の境地）

第9の境地：非想非非想処（有頂天）（輪廻の頂点の境地）

208

三十七菩提道品は

出離の自相〔を持つ〕

空性の相は無所縁であるため

相を離れている

無所縁：心に向けて認識すべきもの、実体という対象がないこと

209

無相は寂静であり

第三解脱門の相は

苦しみと無明がないことである

〔八〕解脱の相は、解放させることである

八解脱：①色（物質的存在）の色・形などを見ること。

②内に色（物質的存在）がないことを識別する（想）ことにより
外の色（物質的存在）などを見ること

③第四禪を本質とする苦しみからの解脱

④～⑦第四解脱から第七解脱までは、四つの無色界の禪定を本質とする。

⑧識別作用（想）と感受作用（受）の滅尽が第八禪。

これらの解脱は、等引（平衡状態に住する）への障害から解放させるものなので、
解放させるものという相を持つ。

210

一切の力は

非常によく確立させるという本質であると説かれた

守護者の〔四〕無畏はみな

非常に堅固な本質である

仏陀（如来）の十（自在）力：

①寿命、②禪定、③資源、④行為（業）、⑤再生、⑥誓願、⑦信解、⑧神通力、⑨智慧、⑩法

四無畏：現等覚無畏、漏尽無畏、説障法無畏、説出離道無畏

（自利のため、①捨てるべき汚れを捨て、②良き資質を全て得る。

利他のため、③対策の道を示し、④何を捨てるべきかを示す）

211 四無礙解

四無礙解のすべては

弁才などが無量（計り知れない）であるという相を持つ

有情利益をなし

大いなる慈悲と言われる

四無礙解：四つの障り（四無礙）がないことを個別に正しく理解すること）

法無礙（教えを個別に正しく知ること）に障りがないこと）

義無礙（教えの意味を正しく知ること）に障りがないこと）

辞（詞）無礙（言語表現を・・・

弁無礙智（樂説無礙）（有情のために明らかに教えを説くことを・・・）

212 ab

苦しみを持つ者たちを守り
大いなる慈悲の喜びは歓喜の相を持つものである
平等心は
混ざらない相を持つものであると言われる

213 十八不共法

仏法は〔他の法と〕混ざることなく
十八〔の特性がある〕と認められている
師は、〔十八の特性を〕奪われることがない
ゆえに、奪われないという自相を持つものである

十八不共法：仏陀だけに特有な、他と共通しない18のすぐれた資質。

214

一切智性の智慧は
直接知覚の相を持つものであると認められる
他の智慧は部分的なので
直接知覚とは認められない

215

有為法の相と無為法の相
それは、それ自体〔の自性が空なので、〕
それによって空であり
それは自相が空性である

以上、〔16空性のうち、第14番目の空性、〕自相空性について説明し終えた。

216 (15) 不可得空性（認識の対象がないという空性）

この現在はとどまらず
過去と未来は存在していない
〔これらの三世において〕どこにも得られないので
これを不可得と言う

217

その不可得は
自性から離れており
永遠にとどまることなく、滅することもないので
これは不可得と呼ばれる空性である

218 (16) 無性自性空性

縁（条件）から生じたため
事物には集合したものという自性はない
集合したものはそれ自体〔の自性が空なので、それ〕によって空であり
無性自性空性であると言われる

以上、十六空性について詳しく説明した。

（次に、別の四つについて述べる）

219 ①有性空性

事物という言葉は
要約すると五蘊のことを言う

それら（五蘊）はそれ（五蘊）〔の自性が空なので、それ〕によってこれを有性空性と説明している

有性：事物、存在のこと

220 ②無性空性

要約すると、無性とは一切の無為法を言うその本質は無性であり、それによる空性が無性空性である

無性：非在、非事物、一切の無為法のことであり、虚空、涅槃などのことである。

221 ③自性空性

自性という本質がないことが自性と言われる空性であるこのように、自性は作られたものではないので自性と呼ばれると述べられている

222 ④他性空性

仏陀たちが生じても生じなくてもよいが実際に一切の事物の空性は他性空性と言われる

223

真実の極みと真如これが他性空性である般若波羅蜜の道によりそれら（二十空性）はこのように言われている

他性：最勝なる真如のこと。

（次に、般若波羅蜜の教えに特に熱意を持つ菩薩たちだけに特有の卓越した第六地の資質を述べることにより、智慧の章を完結する）

224

このように、智慧の光の現れで明らかにする者は自らの手にあるキュルラ（果実の一種）のようにこの三界のすべてを、無始の時より不生であると理解して世俗諦の力によって滅諦に赴く

225

〔第六地の菩薩は〕常に滅諦を考察する三昧で守護者を持たない有情に対し、慈悲の心を起こされるさらに、〔この菩薩は、〕如来のお言葉より生じた者（声聞）、中位の仏陀（独覚）とともに、すべての者たちをその智慧で打ち負かす

226

世俗と勝義という大きな白い翼を広げこの白鳥の王者を普通の白鳥の先頭に据えて善の風の力で勝利者（仏陀）の功德の海を越え最勝なる彼岸へ飛んでいく

第六発心の解説を終えた。

以上が『入中論』の解説より、「現前」と呼ばれる第六発心である。

第七発心「遠行」

(真実の極みについての禅定に入り、一切の戲論が滅している)

1

この遠行〔地〕では

一瞬一瞬に滅に入り

〔第7地の菩薩は〕よく燃え上がる方便波羅蜜を得る

第七発心の解説を終えた。

以上が『入中論』の解説より、「遠行」と名付けられる第七発心である。

第八発心「不動」

(誓願が清らかになり、滅から立ち上がる)

1

何度も繰り返し積んだ過去の善行から大いに獲得するため

どこでも不退転となり

不動の大いなる本質に入る

2

これにより、誓願は非常に清らかになり

勝利者（仏陀）たちによって滅〔の禅定〕より立たされる

3

執着のない心は一切の過失とともにとどまることがないので

第8地ではその汚れが源とともによく鎮められる

しかし、煩惱が尽きて三界の師（ラマ）となっても

虚空のように果てしない仏陀たちの資質をすべて得ることはできない

4

輪廻が滅しても、十自在力を得ることはできる

それらによって輪廻の有情たちに自らの様々な姿を示すことになる

仏陀（如来）の十（自在）力：

①寿命 ②禅定 ③資源 ④行為（業）⑤再生 ⑥誓願 ⑦信解 ⑧神通力

⑨仏陀の他の宗教と混ざらない特性（智慧） ⑩法

第八発心の解説を終えた。

以上が『入中論』の解説より、「不動」と名付けられる第八発心である。

第九発心「善慧」

(完全に清浄になり、四無礙解を得る)

1

第9地では、〔菩薩の〕力はすべて完全に清浄になる

同様に、無礙解という自らの四つの功德の完全な清浄も得る

四無礙解（四つの障りがないことを個別に正しく知ること）

法無礙（教えを個別に正しく知ることには障りがないこと）
義無礙（教えの意味を正しく知ることには障りがないこと）
辞（詞）無礙（言語表現を正しく知ることには障りがないこと）
弁無礙智（樂説無礙）（有情のために明らかに教えを説くことを知ることには障りがないこと）

第九発心の解説を終えた。

以上が『入中論』の解説より、「善慧」と名付けられる第九発心である。

第十発心「法雲」

1

第9地では、すべての菩薩は仏陀たちから聖なる灌頂を授かる
智慧が特にすぐれたものとして生じることにもなる
すべての雨雲から雨が降るように
一切有情の善の収穫のために菩薩からも自然に法の雨が降る

第十発心の解説を終えた。

以上が『入中論』の解説より、「法雲」と名付けられる第十発心である。

十地において菩薩が得る功德について（『十地経』より）

ここからは初地の発心から始めて、それぞれの地で得る数々の功德について述べる

（菩薩地の功德）

1

その〔初地の〕時、この菩薩が百仏にまみえ
百仏の加持を授かったことも理解する
まさにその時、〔菩薩は〕百劫に渡ってとどまり
劫の始まりと終わりも完全に知る

2

智慧ある者たちは、何百回も禅定に入っては出る
この菩薩は百の世界をすべて揺るがし、照らすことができる
同様に、神通力によって菩薩は幾百もの有情を熟させ
幾百もの関連する浄土にも行くことになる

3

この菩薩は法門を正しく開き
牟尼の息子（菩薩）は自分の体から多くの体を現わすこともなす
眷属とともにあるそれぞれの体は美しく豊かで
幾百もの勝利者の息子（菩薩）たちと眷属をも出現させる

4

歡喜地にとどまる智者はこれらの功德を得る
これと同様に、離垢地にとどまる者は
それらの功德の千倍を得ることになる

〔第三地など〕次の五つの地においては、〔第三地の〕菩薩は十万倍、

5

〔第四地の菩薩は〕千万倍、〔第五地の菩薩は〕百億倍、
〔第六地の菩薩は〕千億倍、〔第七地の菩薩は〕千億倍の功德を得る
それからさらに、十万億倍を得る
百兆倍をすべて得て、さらに千兆倍、このすべてを完全に得ることになる

6

〔それ以上は数えられないので大まかに言うと、〕
〔第八地の〕不動地にいる菩薩は無分別の瞑想により
幾百千の三千大千世界を合わせたところにある
微粒子と同じ数ほどの功德を得ることになる
7

〔第九地の〕善慧地にいる菩薩は
以前に示した功德の
幾千万無数〔の三千世界〕を合わせた
十倍の微粒子の数〔の功德〕を得る
8

まず、第十地の〔菩薩の〕功德は
言葉の対象領域をはるかに超え
言葉の対象領域でないものもすべて集めると
〔虚空に存在する〕すべての微粒子と同じくらい巨大な数になる
9

毛穴の中に、菩薩たちとともに
完全なる仏陀のおからだを無数に現わし
同様に、神々、阿修羅、人間たちも
一瞬ごとに現すこともできる

菩薩地において得られる功德について説明し終えた。
次に、仏陀の境地における功德を少し述べようと思うので、礼賛によって仏陀釈迦牟尼について述べよう。

仏陀の境地における功德について

（一瞬にして一切智智を得る）
10
汚れなき虚空を月明かりで照らすため
かつて十力を生じた地でああなたは再び努力して
色究竟天（アカニシタ天）で努力され
一切の功德を極めた無比で最勝なる寂静の境地をああなたは見出された
11
たとえ器に違いがあっても、〔器の中の〕空間に違いがないように
事物の違いもそこには存在しないので
同じ味の本質として正しく心に理解され
善き智慧者であるあなたは一瞬にして認識対象をお心に理解された

A 反論者の主張

真如が寂静であり、認識対象がないならば、認識しない真如について誰が説くというのか？

12
真如が寂静であるならば、そこに智慧は働かない
智慧が働かないのだから認識対象を確かに知ることはない
何も知ることがなければ、知る者などどうしてありえよう。それは矛盾である。
あなたは、知る者がいないのに、他者に「このようである」と言って誰が示すと言うのか

B 答えて言う

13
不生が真如であり、智慧も不生なら
その時それは、智慧がそれ自体に依存して真如を認識するようなものである

同様に、心が何らかの姿を持つものになり、それが対象を完全に知るように世間の慣習に依存して〔心はその対象を〕知る

(仏陀の三身について)

14

〔仏陀〕の報身は〔百の〕功德によって成就され
化身から、虚空から、その他〔草、木、壁、岩など〕から
その力によって法の真如を説くお声が生じる
それによって世間も真如を知る

15

大きな力を持つ壺職人が
ここで長い間努力して回した轆轤（ろくろ）は
壺職人が今何も努力しなくても回るように
水瓶などの因と見られる

16

今、努力しなくても回るように
〔仏陀は〕法身の本質としてとどまられ
人々の善と〔菩薩の〕誓願の特性によって
仏陀がなされる偉大な行いははかりしれない

(法身について)

17

認識対象という乾いた薪を
残らず焼き尽くしたので寂静である
勝利者（仏陀）たちの法身は、その時不生不滅で
心の止滅をそのおからだで現前される

18

如意樹のように明らかで寂静なお体
如意宝珠のように無分別
有情が解脱するまで世間を満たすために常住である
これは戯論と離れたものに現れる

(報身について)

19

牟尼はほんの一瞬のうちに、一つの色身に、
それと同類の因である自らの前世を現わすことができる
〔それらは〕すでに消滅しているが、何の努力も必要とせず
〔牟尼は〕余すところなくそのすべてを示された

(かつて世尊は、布施波羅蜜の行いをどのようにされたかと言うと、)

20

〔この上なく美しい〕仏国土において、諸仏、
諸仏の〔卓越した〕お体、行い、〔お言葉の〕力、
ありとあらゆる声聞の僧伽、
〔三十二相八十種好を具えた〕菩薩のお姿、

21

同様に法、同様に〔バラモンなどの種姓に生まれた〕者たち、
聴聞して〔菩薩の学処をすべて受け入れた〕菩薩行の実践、
これらをできる限り〔の時と量で、声聞、菩薩の僧伽など〕に捧げるといふ布施行を
余すことなくひとつのお体で示された

22

同様に、持戒、忍耐、精進、禪定
智慧を实践された時の
かつての完全無欠な修行のすべてを〔余すことなくひとつのお体で示され〕
お身体の毛穴の中にさえ明らかに示された
23

〔自らの修行を示されたのみならず、〕
過去と未来の諸仏、現在〔の諸仏も〕
虚空の果てまで届く高らかな響きで法を示され、
苦しみに捉われた有情に安息を与えて世間にとどまられている
24

初地の発心から悟りの心髄に至るまで
一切法は魔術の本質を持つものであることを悟られて
ご自身のように〔他の諸仏の諸行も〕
毛穴の中にまで同時に明らかに示された

（世尊ご自身の行ないのみならず、他の諸如来の行いを同時にご自身の毛穴の中にも示される）
25

そのように、三世の菩薩たち、
独覚、声聞の聖者たちすべての行いと
それ以外の凡夫の状態にある時〔の行い〕も
ひとつのお体で一切を毛穴の中に示された

（以上卓越したお体について説明した。次に、すでに妄分別はなくても望み通りにお持ちのものを
変容させられるという卓越した資質について示すと、）
26

この清らかな方は、ただ望まれるだけで
ひとつの微粒子を果てなき虚空の世界として現わし
果てなき虚空の世界をひとつの微粒子として示されるが
微粒子が粗大になることもなく、世界が微小になることもない

（世尊に独自の卓越した功德を述べることで世尊に対する礼賛を述べる）
27

妄分別がないため
あなたが輪廻の終わりまで
一瞬ごとにされる様々な行いの数は
南瞻部洲すべての微粒子ほど無数である

（仏地は仏陀の十力によって分類されているので、その分類を要約して説明する）
28

- ①道理と非道理を知る力と
- ②同様に、行為の果報を〔知る〕心と
- ③多様な信解を心に理解することと
- ④多様な世界を知る力と

- 29
- ⑤同様に、最勝なる力と最勝ではない力〔を知る力と〕
 - ⑥智者と一切有情（凡夫）〔の力を知ることと〕
 - ⑦三昧、解脱、禪定、
入定などを知る力と

- 30
- ⑧前世の記憶を知る力と
 - ⑨同様に、死とその後の生を知る心と

⑩汚れの滅尽を知る力

十の力とはこれらのことである

(仏陀の十力について『聖陀羅尼自在王經』よりそれぞれを解説する)

1：道理と非道理を知る力

31

何らかの因から何らかのものが必然的に生じる

それはその道理を知る方々によって説かれた

この説明に反することが非道理であり

そのような無限の認識対象を障りなく知ることが〔道理と非道理を知る〕力である

2：業と果報を知る力

32

望むこと（快い行い）、望まないこと（不快な行い）、それ以外のこと（快い行いと不快な行いが混ざった行い）、滅尽の因となる汚れなき行い、

〔快・不快・その混合という三種の〕行いが熟した結果は非常に多様であり

それを知る障りなき力が個別に働く

三世の認識対象を余すところなく覆い尽くすのが〔業と果報を知る〕力と認められている

3：様々な信解（熱意）を知る力

33

欲望や〔信心など善き法を集めた行い〕の力が〔種となって〕生じる信解（熱意）には劣ったもの、中位のもの、特に大きな力のあるものと認められる

これ以外の隠された信解（熱意）をも知るのは

三世の有情すべてに遍在する〔様々な信解を知る〕力だと言われる

4：様々な界（要素）を知る力

34

仏陀は〔十八〕界（要素）の分類によく精通しておられるので

眼などの〔内空性などの〕自性を界と説かれた

完全なる仏陀の智慧は無限であり

一切の界の特性に従事する〔様々な界を知る〕力であると認められている

5：すぐれた能力とすぐれていない能力を知る力

35

常に分析力などが大きく、鋭い者はすぐれた者であると言われ

中位と鈍い者たちはすぐれた者ではないと言われる

眼など〔二十二の知覚能力〕が互いに〔結果を〕成立させることを理解する智慧が

一切の相を知ること执着しない〔すぐれた能力とすぐれていない能力を知る〕力であると言われる

6：一切に赴く道を知る力

36

ある道は勝利者の道、ある道は独覚の悟りに至る道、

〔ある道は〕声聞の悟りへの道

餓鬼道、畜生道、天人、人、地獄などへの道

これらを执着なく無限に知ることが〔一切に赴く道を知る〕力と言われる

7：三昧、解脱、禪定、入定、煩惱（六根本煩惱と二十の付随的煩惱）、一切の浄化の起こりを知る力

37

世間の瑜伽行の違いの分類は無限にあり

三昧、八解脱、止、入定の分類は
一つと八つ〔で九定〕になる
これらを障りなく自在に知ることが〔第七地の〕力であると言われる

8：前世における国や姿などを覚えている力

38

無明が存在する限り輪廻にとどまる
過去の自分と他の有情はそれぞれ
無数の有情界という〔ある生から別の生に連なる連続体の〕基盤の上であり
〔前世における〕国や姿などを知る力が〔第八地の〕知る力である

9：死と転生を知る力

39

一切有情のそれぞれの死と転生は
虚空の果てまでの〔すべての〕世間に存続する
〔多様な業が織りなす〕その様を〔世尊は一瞬毎に正しく〕明らかに知り、その時に入られる
〔一切の対象に〕執着がない完全に清らかな無限の力が〔第九地の〕力であると認められている

10：煩悩が減じたことを知る力

40

一切を知る力によって、いち早く勝利者たちが
煩悩をその習気とともに断滅し
弟子などの煩悩も智慧によって断じる
それを執着なしに無限に知るのが〔第十地の〕力であると認められている

（結び：仏陀の功德を喩えによって説明する）

41

空がなくなったから翼を持つものたち（ガルダ、金翅鳥）は空を飛ぶのをやめるのではなく
力尽きたから飛ぶのをやめる
これと同じように、弟子たちとともに勝利者の息子（菩薩）は
虚空のように無限な仏陀の功德を述べる〔力が尽きたゆえに〕やめる

42

ゆえに、私のようなものがあなたの功德の何を知り
何を述べることができようか
しかし、これらは聖ナーガールジュナがすでに述べておられるので
疑いを捨てるために少しだけ述べた

43

そこで、深遠なる〔教え〕とは空性のことであり
他の功德は広大なる〔方便の〕教えである
深遠で広大な道を知ることにより
これらの功德を得ることになる

44

さらに、不動のお身体を持つあなたは三界に降臨され
様々な化身を現して、降臨、誕生、成道、寂靜なる法輪をも示された
このように、悪行をなして願望の縄に縛られた世間の多くの有情たちを
あなたは慈悲のお心で涅槃に導かれる

（真如はただひとつであり、乗り物も一乗のみであることを示す。『法華経』より）

45

真如を知ること以外の他の努力では、一切の汚れを断滅することはできない
諸法の真如は変わることなく、分類もなく〔ただ一つである〕
ゆえに、真如を対象とするこの智慧も〔一つの本質のものであり〕別のものなのではない

そこであなたは有情に、乗り物（修行道）〔はただ一つであり、三乗という〕分類はないと示された

（不住涅槃について）

46

有情に過失を生み出させるこれらの汚れが存在する限り
世間は仏陀の深遠なる活動領域に入ることはない
善逝よ、あなたはすぐれた智慧と慈悲という方便を同時に具えており
あなたは「私が〔一切〕有情を解放する」と誓われた

47

ゆえに、賢い〔船長〕が宝の島へ行く人たちの疲れを除くために
魅力ある都市を〔奇跡的に〕出現させるのと同じように
あなたはこの〔劣った〕乗り物を、〔声聞、独覚の〕弟子たちの心を鎮めるために示し、
心が訓練された者たちには、心を〔世間的な現れへの執着から〕引き離すことを別個に説かれた

（釈尊が実際に悟られた時間の長さについて述べる）

48

余すところなき方位と仏国土におられるすべての善逝は
仏国土すべてに存在する微粒子の数ほどもあり
最勝なる仏陀の境地に至った劫の数はそれほどもある
しかし、あなたのこの秘密を言葉で述べるべきではない

（釈尊が実際に悟りにとどまられた時間について述べる）

49

勝利者（仏陀）がすべての世間を完全に鎮められない限り
虚空が消滅しない限り
般若仏母によって生み出され、その慈悲によって育てられたあなたが
完全なる涅槃の寂靜に入ってしまうことなどどうしてあろうか

（一切有情を救済するために無限の時間をかけて有情たちを思いやる諸仏の慈悲心はどのようなものかと言うと、）

50

〔世尊には〕無明という過失によって
毒入りの世間の食事（五欲）をとった人の家族に慈悲の心が生じる
これと同様に、毒を飲んで苦しむ〔ひとり〕息子の母親〔以上の〕苦しみはない
それゆえ、守護者は最勝なる寂靜に赴くことはない

（世尊には大いなる慈悲の心があるため、完全なる涅槃に入られることはない）

51

なぜならば、賢くない人々は、ある、ないということに執着し
生・住・滅や、愛しい人と会えない苦しみ（愛別離苦）、憎い人と出会う苦しみ（怨憎会苦）や、
罪深い者を得て、世間は〔あなたの〕慈悲の対象となる
慈悲深い世尊よ、あなたのお心は寂靜に背を向けて、あなたが涅槃に入ることはない

（結び）

52

〔ここで示した〕この流儀は
比丘チャンドラキールティ（月称）が中観論から集めて
経典に述べられているように
教え通りに述べたものである

53

これ以外の教えは

この教えのようではない
同様に、ここに書かれた流儀〔に匹敵するものは〕他にはないと
学者たちが確認している

54

ナーガールジュナの智慧の海は非常に広大であるため、その色合いに恐れおののき
この善き流儀から遠くに捨て去られた者たちがいる
〔ナーガールジュナの〕偈頌は睡蓮の花を開かせる水滴のようであり
今、チャンドラキールティの願いは完全に果たされた

55

解説し終えたこの深遠で恐るべき真如は、以前よく修習していた人なら必ず理解するだろう
しかし、それ以外の他の人々（非仏教徒たち）は、これを広大に聴聞していても〔空性に対する
信解の習気がないので〕理解することはないだろう
ゆえに、〔ヴァスバンドゥなど中観以外の典籍〕を自らの心に結びつけた人々が〔他の流儀を理
解したことは〕見受けられるが
自我〔があると〕主張する〔ナーガールジュナ以外の〕他の諸流儀を喜ぶ心を捨てるべきである

56

阿闍梨ナーガールジュナの善き流儀を述べることで、私の福德が諸方の果てまで行き渡りますよ
うに
秋の青空の星のように、煩惱に苦しむ心を白く照らし出してくれますように
心という蛇が蛇冠の宝珠のようなものを得て
それにより、真如を理解することで全世界が善逝の境地に至ることができますように

（奥付：著者と翻訳・改訂の記録）

『入中論』の解説は甚深と広大なる道において明らかにされている。著者の阿闍梨チャンドラキ
ールティは最勝なる乗り物にお心を浸され、奪うことのできない智慧と慈悲を具えた方が、絵に
描いた子牛から乳を搾るというたとえにより、実体への捉われを排除するために書かれたもので
ある。以上で『入中論』が完結した。

諸引用はほぼ〔既存の翻訳〕経典通りに書いた
のちに〔サンスクリット語とチベット語の〕両方が手に入れば
根本頌と註釈を語義通りに訳して
公正に分析するべきである

カシミールのアヌプラヤー市（無比城）の中央、ラトナグプタ寺院で、カシミール王のシュリ
ー・アーリヤデーヴァの時代にインドの学者ティラカ・カラシャとチベットの翻訳官パツァブ・
ニマタクがカシミール本に合わせて訳した。のちにラサのラモチェ寺でインドの学者カナカヴァ
ルマンとパツァブ・ニマタク翻訳官がインド東方本に合わせて改訂し確立した。

（自註の最後：このテキストの量は、12節（バムポ。チベット語のみに存在するテキストの区分
のひとつ）と6分の1で、偈頌の数は3550偈である。）

【日本語試訳：マリア・リンチェン 2017年9月】